

メランコリーの光学

——梅崎春生における鬱病の病理とその言語表象——

木村 功

人つ子一人居ない此の病室に
私は紙のやうにふるへて居る
心に巣くふ死の恐怖と生の執着とに

何だか月が山に隠れる予感がする
蟋蟀の声も細つて来た様だ
私は高熱に浮かされながら
山の端に沈む月光の最後の 一条の
執着に狂奔する光景を幻想する

詩篇「死床」(龍南)二二五号、一九三三年七月)は、梅崎春生(一九一五〜一九六五)が第五高等学校時代に発表した作品である。

結核患者に仮託して梅崎が描いて見せたのは、「死床」というタイトルと当時結核が致死性の病と見なされていたことを参照すれば、高熱に侵されて死の気配におびえながら、なお生に執着する「私」という生命の姿ということになる。ここにはすでにステレオタイプ化した結核患者像と、生に執着する存在としてその内面を語る言説モデルが確認できる。十代の梅崎は、自らの生の輪郭を確認するために、このような結核に関する言説モデルを参照し、想像上で死に近接することで自らの心象を表出していたのである。

病や死に近接することで人間の生を対照的に表現するこの方法は、「幻化」に終わる梅崎文学に隠顕し続けるものである。そしてこの生と死の対照法は、既に梅崎文学の特質として指摘されている戦争、戦後の日常性、同行する他者(分身)の問題などと関連しながら、梅崎文学を構成する主

要なテーマとなっている。本論では、梅崎文学の主要な構成要素の一つである「病」、すなわち鬱病・アルコール嗜癖(飲酒癖)・肝機能障害の中から、特に鬱病に焦点を当て、梅崎文学における言説化とそれによって構成される世界像の意義について考察する。

一

梅崎はしばしばエッセイで自身の鬱状態に言及することがあり、また作品にも題材として取り上げている。梅崎の鬱病の病跡については、すでに主治医であった広瀬勝世が「おしぎな患者」(月報「梅崎春生全集」第一巻、新潮社、一九六六年一〇月)や、梅崎春生「気質季報」第一〇号、一九七六年二月)の中で、精神医学の専門分野から詳細な分析結果を報告している。

前略)私はここで彼の「うつ病」を明らかにしたい。それは確かに従来の「内因性うつ病」の範疇に入れられるものであるが、ここでは、うつ病の病因論は多因的である」という極めて実地的な見解に立つ *Pollett* に従って、「うつ病の生理的機能変調」を主症状とする「身体的うつ病」という言葉を用いたい。^{注1}

広瀬は、さらに病因を「素因的因子」と「促進的因子」に分け、「素因的因子」として「遺伝・負因・家族歴にある弟の自殺・年齢・生理的機能度調の時期」、執着性・性格特徴」を指摘し、また「促進的因子」として「心理的促進因子としての妻の病氣」「身体的促進因子としての肝疾患」「化学的促進因子としてのアルコール」を挙げている。アルコールは、梅崎の命を奪う原因となった肝硬変の化学的因子であるが、広瀬はこれについてもアルコールは彼にとって、過敏な神経を調節するトランキライザーの役目を果たしていたことは明らかである。しかし、そのアルコールによる障害も徐々

に彼の肉体と心を蝕み始めたのであるから、アルコールとうつ状態の悪循環は遂に生涯断ち切れなかったのである」と述べる。広瀬には、梅崎のアルコール中毒や幻覚が見られたことへの指摘もあるが、ここでは梅崎の創作活動において、アルコールが彼の抑圧を解放するという重要な役割を果たしており、アルコール嗜癖はそのことと密接に関連していたことを確認するにとどめる。

梅崎は生涯に二度、顕著な鬱状態を発症している。一度目は、東京帝国大学在学中の二三歳の時で、傷害事件も起こしている。しかし、第五高等学校時代の梅崎の日記を読んでいると、すでに「不安」「悩み」「憂鬱」という言葉が頻出していることに気づく。一九三二年一月二十六日の日記には、中村先生神経衰弱。今日の時間はお話。苦しい身の事を話されたにも拘らず皆の同情は一時的のものであった。中略「キ印」とまで冷評した人間。あいつはきつと感情を悪魔に売り払ったに違いない」と、神経衰弱の教師に対する同情と残酷な批評をする同級生への反撥を書き記しているのだが、その心理の背後には、むしろ此の世で、中村先生の如くなる「一番可能性の多い男は俺じゃないかと思う」注2とあるように、自分自身の精神状態に対する強い不安が潜在していたことをうかがわせる。

学生生活を振り返ると、いつも私にははじめとした感じがつきまとう。青春期にあり勝ちな憂鬱症、それがずっと私には続いていたような気がする。もしひとければ、はつきりした神経衰弱として、治療の対象になっただろうが、病氣と名付けるほどひどくはなかったので、かえってそれが私を不幸にしたらしい。注3

大学時代の梅崎について霜多正次は、彼は寝るとき必ず病人のように額にタオルをぬれたのでなく、乾いたのをのせる習慣があった。そうしないと感覚が不安定になるのだといっていた注4と回想している。この奇癖については松本文雄も、もともと彼は、尖ったものをきらっていた。昼寝のときなど、タオルをきれいにたたんで額の上においた。これは、彼に

よると、何よりも繊細な神経の持主である証拠」だそうで、それがないと、針みたいなものが天井から落ちて来そうで熟睡できぬ、と言った注5と述べる。これは「強迫障害」と診断されるものであるうが、梅崎が「憂鬱症」の他にも強迫的な観念の支配下にあったことが伺われるエピソードである。

そして梅崎がいう「憂鬱症」は、東京帝国大学進学後の一九三七年に、重症なものとして発現することになる。

それにあの憂鬱症が、私には周期的にやって来た。鬱状態の時には、被害妄想も伴った。下宿の廊下の曲り角に女中たちがあつまって、私の悪口を言っている。下宿人たちも私の悪口を言っている。夜中に私は女中を呼んで、そんなにおればかりいじめないで呉れと、涙ながらに頼んだこともある。またその妄想で腹を立て、下宿の雇い婆さんを殴って怪我をさせ、四泊五日の留置場入りをしたこともあった。今だからこそあれは妄想だったと判るのだが、当時は本気であった。

こういう状態は、生来の私の身体の虚弱さからも来ているのだろうが、学資を貰いながら学校に出ていないという自責、また将来に対する不安からも生じたに違いない。もちろん外の状態もあるけれど注6

この傷害事件の経緯は、作品「その夜のこと」(別冊小説新潮)一九五四年一月「冬の虹」(小説新潮)一九五四年三月に描かれ、エッセイ「私のノイローゼ闘病記」(主婦の友)一九六三年六月注7でも言及されている。前出広瀬は、それはうつ状態から逃避又は脱出しようとして、酩酊に身をゆだねた結果の酒精幻覚症によるものであると(梅崎春生)と述べているが、これらのテクストを読むと、アルコールによって解放された抑圧のエネルギーの凄まじさもさることながら、忘れ去りたいような事件をわざわざ後になって作品やエッセイなどに言説化し自分を分析して見せている点で、抑圧の原因となる梅崎の「几帳面さ」「秩序志向性」を認めるこ

とができるのである。

その後の梅崎は精神病院が登場する 因日「黄色い日々」を一九四九年に発表するが、自身の鬱状態に関する言及は見られず、症状は寛解していたと思われる。しかし一九五三年には再び 憂鬱症 の兆候が表れ、一九五八年四四歳の時には、夫人がノイローゼで入院したのと呼応するように秋口から心身に違和感を覚えるようになった。

その日 木村注——暮の対局中倒れた日 をきっかけとして、心身の違和が何となく始まり、だんだん増大して、正月頃には最高潮に達した。心身の違和と言っても、正月頃は心の方が八分、身の方が二分、あるいは九分一分の配分で、気分の方が参ってしまったのである。常住坐臥死のことを考えている。死について哲学的省察をめぐらしているのではなく、もっと低次元でそいつとつき合っているのだ。死についていくら考えたって、結論は出ないことは先刻御承知だけれど、向うから忍び入ってくるからかなわない。注8

危機感を抱いた梅崎は、広瀬貞雄医師の勧めで一九五九年五月二日に近食病院神経科に入院して持続睡眠療法による加療を受け、七月一日には退院することができた。その折の体験は、神経科病室にて「新潮」一九五九年一〇月）や 私のノイローゼ闘病記」というエッセイに詳細にまとめられている。

ここまで梅崎のエッセイの一部を引用して、彼が自覚していた鬱状態の概略を紹介してきたのだが、ここで留意しなければならないのは、鬱病に関する認知が進み神経科へ通院することに心理的抵抗を覚えることも少なくなってきた現在とは異なり、一九六〇年代当時、鬱病の患者でありそれを公表することが社会的にどのような意味を持っていたのかという点である。『幻化』の批評は悉くが主人公の精神病院脱出について触れている為、恵津子夫人は彼が精神病院に入院した様に誤解されることがつらいと訴えていた（『おしぎな患者』）という広瀬勝世の証言にもあるように、当時の

精神病に対する社会の認知度を考慮すると、梅崎が自分の鬱病治療の経過をエッセイに書き記したことは果敢な試みのように思えるのである。

それというのも北中淳子によると、江戸時代には「気鬱」と呼ばれて認知されていたものが、明治に入って西洋医学の知見の下遺伝による脳病と捉え直され、呉秀三により「鬱病」は明らかな「脳病」として限定的に定義されると共に、極めて特殊で、危険な病として描き出された結果、明治以降、精神病患者の迫害がいわば国家的な政策として押し進められる中で、精神病の「カテゴリー」となった「鬱病」と診断されることは社会的な死をも意味しかなかった。注9 からである。十九世紀末にクレペリンによって確立された躁鬱病概念は、躁鬱病という基盤から鬱病だけが発症する単極型と躁鬱両方が発症する双極型という区分がなされていた。一九五〇年代になって躁鬱病と鬱病が分けて考えられるようになり、一九六一年にはテレンバツハの『フランコリー』みずす書房 が『フランコリー親和型』と呼ばれる性格傾向を持つ人間が単極型鬱病を発症するというモデルを紹介し、この学説が普及したことによって鬱病は精神病としての躁鬱病から解放されることになったのである。ただし梅崎に下されたような内因性鬱病は「余だ原因のはっきりしない脳内の変化が背景となって引き起こされる精神の変容」とでも言うべき病態で、統合失調症」とか「躁うつ病」という病名と強い結びつきを持っているものであり、二〇年ほど前までは、精神科が真に扱うべきは「内因性のうつ」であり、神経症性うつは精神科医療のいわば辺縁にあった。注10）と考えられていた。つまり一九八〇年代でも、内因性鬱病は精神病との関連で捉えられていた病態であったのである。

以上見てきたことから、一九五〇、六〇年代の段階で鬱病と精神病に対する一般の知見が早々に改まるものでなかったと推測できる。加えて一九五〇年制定の「精神衛生法」（一九六五年改正）は、精神病患者の強制入院とそれに伴う費用の国庫負担を骨子として掲げて患者を病院に強制隔離する姿勢を強く打ち出しており、それは精神病患者を社会の「他者」として析出し排除するイデオロギー装置として機能していた。引用したような梅

崎夫人の嘆きが生じるのは、当然のことなのである。

梅崎の神経科入院記を、鬱病がまだ精神病の中に包括されて捉えられていた時代の社会的コンテクストの中に位置づけてみると、私の病名は、／鬱状態 不安神経症状／というのである。私のノイローゼ闘病記）

として、梅崎が自身の病名を鬱病ではなく神経症であることをわざわざ言明しているのは、精神病との差別化を企図しているからだとも解釈できる。しかしそうではあっても、社会の「他者」と遇されがちな神経科入院患者の姿や治療過程を、それが軽症患者のものであっても、積極的に提示していたことは、ほとんど知られることのない世界の患者たちの姿を広く周知させる点で、当時は啓蒙的な意義があった。そして、梅崎の試みはそこだけに留まるものではなかったのである。

二

梅崎文学には、早くから神経症や精神病院 患者が登場している。因「風雪」別冊第二号、一九四九年四月）は、私」が友人を伴い精神病院内を見学する場面から始まる。麻痺性痴呆や、躁鬱病や、分裂病の患者たち」の姿を描きながら、最初 私」はそこで自分と患者たちとの間に截然とした相違を見出すことができず、不安を覚える。

その道があるいたり、入口の石段に腰かけて休んでいたりする男たちが、あれが軽症患者なのか、看護人なのか、私には見分けがつかなかった。私自身にしても、水野国手と同道でなかったら、他からはどう見えるかは判らなかった。その考えは幾分、私の心を寒くした。しかしそんなことを感じるのは、私だけであるらしく、数万坪のこの区域内に住する人々は、おおむね他人の生き方に無関心なふうであった。放心とか黙殺というのではなく、もつとつめたく澄んだ無関心が、ここ全体を支配していた。

大きな病室がっらなっている病棟では、ひとつの病室に、十人も十五人もいて、思い思いの姿勢で、じっと動かなかった。中略」みな鬱然として表情をなくし、自分の世界にとじこもっているようであった。

自分と患者が区別できないのではないかという思いで、私の心を寒くした 私」ではあったが、直ぐに自分と患者たちとの相違点を発見する。それは患者達が、おおむね他人の生き方に無関心なふうであることで、私」が感じ取った つめたく澄んだ無関心 自分の世界にとじこもっているという印象は、さらに重症患者の病室をのぞいたことで強化される。

つぎの大きな部屋には、私たちが廊下を通っても反応を示さない、うずくまったままの患者が何人も住んでいた。それらはなにか鉱物のように、ばらばらに孤立した感じであった。

患者たちの 無関心な態度は、ここに至って ばらばらに孤立した「鉱物」のイメージとして表象される。私」は、患者たちとの間でようやく自分とは明らかに異なる他者性を確認して安堵しているのだが、その後喫茶店で精神病院と似たような ばらばら」で お互いにつながりを持たぬ人々 がいる光景に出くわしてしまう。

ある喫茶店に腰をおろして、私は珈琲をのんでいた。珈琲はへんに甘たるかかった。この喫茶店は、両側の壁に椅子をならべてあるから、客たちはそれぞれ壁を背にして向きあうようになっていた。七八人の客がばらばらに腰かけていた。脚を組んだり頬杖をついたり、飲物を飲んだり菓をすったりしていた。中略」お互いにつながりを持たぬ人々がかもしだす、ある一つの感じがそこにあった。

——脳病院だつてあの喫茶店だつて、似たようなものさ。
人混みを縫って駅の方にあるきながら、そんなことを私は思った。そ

の中にいる人たちが、お互に無関心で生きているという相似を、私はあの日も感じていたのであった。無関心で生きているというのも、ひとりひとりが他からは理解されない世界を、ひとつずつ内包しているせいなのだろう。その世界がだんだん歪んできて、この世の掟や約束を守れなくなる、人は脳病院に入ったり、刑務所に入ったりするのだろう。

「私」は、精神病院や刑務所と、それらを社会の「外部」として排除したところに成立している。こちら側の社会が、実は「外部」と同様に、お互いに無関心で生きているという相似形を描いていることを発見し、そこに共通するひとりひとりが他からは理解されない世界を、ひとつずつ内包している。ばらばらな状態を、こちら側とあちら側の連続性として指摘してみせているのである。無関心の相似形の発見は、精神医学と病院というイデオロギー装置によって截然と区分されているはずの正気（こちら側）と狂気（あちら側）の境界が実は不分明であるということと諷しており、こちら側とあちら側という区画を設けてあちら側を差別する制度の暴力性が暴かれることになる。

続いて発表された「黄色い日々」（新潮）別冊第二号、一九四九年五月）でも「無関心」のモチーフは継続している。身体の不調に気づいた彼は、それが酒を飲んで水に落ちた一件と関連していると考えながら、以下のよう
に思いをめぐらす。

身体はどこかが変調子になっていることを、彼はこの頃はつきり意識していた。とにかく身体がひどくだるくて、それに応じて気持もひどく重い。気持がすこしも動かない。ある鈍麻が彼の全部を漠然と満たしている。ものを眺めても、ただ眺めているだけで、それに働きかける意欲が全然起らない。（中略）

この妙な状態は、何時の頃からか。昨日今日のことではない。身体の機能の狂いを自覚したのは、「週間ほど前、いや十日位になるだろう。食欲がしだいに減退し、身体をうごかすのが大儀となり、何をするのも

いやになってきた。ねじを巻き忘れた柱時計の振り子が、いつのまにか止ってしまいうように、情緒までがだんだん振幅をせばめて、反応を失い始めてきたようだ。現象に呼応して、感じ揺れるものがない。

彼は「本当はずっと以前から、何年も何年も前からつづいていたのかも知れなかったが」と、この「不透明な虚脱感」を抱きながら、雑誌記者の中山とM精神病院を見学したり、家主の白木と花札をしたり、隣人の発田が露店で商売するのを観察したりして日々を過ごしていく。因日」における「私」は、精神病院・刑務所と社会との間の連続性を発見していたが、「黄色い日々」においては「不透明な虚脱感」を、黄疸になった主人公に即して具体的に描くことで、こちら側とあちら側との連続性が直接に感覚的に感受されるよう描かれている。そして彼と精神病院の患者との近接は、彼が本屋でみつけた週刊雑誌に、中山がM精神病院訪問の記事を掲載しているエピソードで明確に提示されることになる。

「……またある患者によつては、すでに感情生活の変化の最初期に、感興がうすれ、周囲に対する関心と愛情とが減じてゆくのを異様に感じ、悲しみを感ずる事例もあるという。自己が現実生活から徐々に隔てられてゆくように実感するのである。（後略）」

読者は、彼ともども中山の記事を読みながら、彼の「不透明な虚脱感」が「精神分裂病者」の病状に関する記述と類似していることに気づく。彼は記事と併載されている病棟の写真に自分の姿が写っているのを認め、彼と患者とを同一視する中山の視線とその悪意に気づいて「つめたい苦笑」を浮かべるのである。精神病院の「外部」にいて患者を観察していたはずの彼が、精神医学の言説を祖述するだけの中山の解釈行為によって、今度は観察される側（配置されてしまう。観察する「健康」な者が、観察される「病んだ」者へと容易に転換されてしまうこのエピソードは、因日）同様「健康」な者と「病んだ」患者との境界の曖昧さを浮かび上がらせ、そ

れにもかかわらず観察するもの 社会・健康」と観察されるもの 患者・病氣」を析出してやまない精神医学の言説・イデオロギーの暴力性を提示しているのである。

因日「黄色い日々」の連作は、精神病患者が示す「無関心」を起点にして、戦後「ぼらばら」になった日本社会の人間関係を問題として提示しながら、精神病患者という「他者」を析出しつづける戦後の精神医学的言説そのものを相対化する試みであった。

三

因日「黄色い日々」において見出された社会・健康」と外部・病」との連続性のテーマは、「他象」「幻化」においても継承されながら、さらに外部・病」の視点から人間のフラジリティ「脆さ・弱さ」を表現することへと展開していく。

他象」「群像」一九六三年 二月」の中で、問題にされているのは「顔」である。彼の顔をみると緊張を走らせる名前も知らない平凡な顔立ちの男と、チンドン屋をみると躁状態になりやがて鬱状態に落ち込んで行く躁鬱病の内山老人が登場する。

チンドン屋のエピソードで問題視されるのも顔であり、その顔について以下のような会話が取り交わされる。

チンドン屋というのは、特別の商売だ。あれは街を歩いているけれど、人間の素顔を出していない。厚化粧をして、服装だって時代離れをしている。つまり人間じゃなくて、仮のものだ。仮象だね。考えてみると、あれは気味の悪いものだ」

中略

ある顔を見ると、突如として反応を起こすのは——
彼はあの男のことを思い出しながら言った。

何か底深い関係があるのかもしれない」

ある顔って、誰の顔だ？」

チンドン屋の顔さ。あれは皆同じような顔をしている。塗りたくって同じ型になつている。表情がない」

表情はあるだろう。笑ったり——」

あれは表情じゃない。顔の筋肉が動いているだけだ」

彼は彼等のほんとの表情を、「度見たことがある。一年ほど前彼が散歩していると、道ばたの小公園の入口で、チンドン屋の二組が車座になって、昼の弁当を食べていた。食べながらおしゃべりをしていて。生き生きとした表情や笑いが、厚化粧を通してはつきり判った。今まで禁じられたりしげられたり抑圧されていたものが、いっぺんによみがえっている。その感じがあるショックを彼に与えた。（神経科病室） 傍線引用者）」

すでに「因日」「黄色い日々」で見えてきた「無関心」の変奏が、ここに認められる。最初チンドン屋の顔は「人間の素顔」ではなく「表情がない」ととされている。服装も時代離れをしているために、彼らは「気味の悪いもの」「仮象と見なされていた。それは人間でありながら、ぼらばらに孤立した「鉱物」と化していた「因日」における精神病院の患者たちの姿を髣髴とさせる。鷺田清一は、人間の顔について以下のように述べている。

わたしは自分の顔から遠く隔てられている。あるいはそこへいたる直接的な通路を欠いている。言いかえると、わたしは自分の顔に、自分でも気づかないその微妙な変化に、他人の顔をまなざすことによって、間接にしか近づくことができない。わたしがそれであるところのものに他者を経由してしか近づけないということ、このことは、わたしというものがけつて閉じた存在ではないこと、わたしというものが穴やすきまだらけのイメージのようなものとしてしか存在しないことを示している。（注11）

驚田は顔に関する考察を通じて、人間の主体性が他者の介在によって構成されており、その意味で人間存在が閉じられたものではないことを指摘する。このことから翻ってチンドン屋について考察してみると、主体としての「わたし」を必要とせず、その意味で「顔」をもたない彼らは、自らの顔や身体をメディアとして客体化した者で、人間というよりは仮象の存在であるということになる。そこに在りながら「人間」ではなくメディアを体現する存在。それはあたかも「鉱物」と表象された精神病患者に等しい存在といえよう。「幻化」にも登場する内山老人のエピソードは、そのことを別の角度から証明している。精神科の病室内で、五郎は病室仲間と共謀しチンドン屋の真似をして内山老人の反応を見ろという「危険で残酷な試み」を実行する。

爺さんはきよとした表情で、しばらく五郎たちの動作を眺めていた。それからにやにや笑うと、自分も茶碗を持ってベッドから飛び降り、チンドン行列に参加した。中略

首謀者の電信柱は口惜しがって

爺さん。気分がおかしくならないのかい」

おかしくならないね」

なぜ？」

お前さんたちが本もののチンドン屋でないからさ」

と爺さんは答えた。(砂浜)

「仮象」の場合とは異なり、内山老人と五郎たちの間には、同じ病室仲間であることからすでに人間関係が前提としてあるために、チンドン屋のように「無関心」を示す「鉱物」化が生じないのである。このことから見る／見られるという相互的視線が介在する人間関係が消失し、メディアと化した人間の無気味さを表わすために装置されたのが、チンドン屋の「顔」を見て「何か転換が起きる」(仮象)という躁鬱病患者内山老人であることがわかる。

このエピソードを参照することで、彼の顔を見て緊張するという男の謎にも解答を与えることができるだろう。男が緊張する理由はテクストの中では物語られないのだが、彼が男に仮象の印象を与えることが暗示されているように思われるのである。「仮象」には、彼が「自分を為体の知れないものに仕立て上げたら、もう恐いものはないだろう。処世術としては最高だね」と友人にうそぶく場面があり、彼の顔が「鉱物」のような「無関心」を表わして「為体の知れないもの」として男に感受された結果、男は内山老人同様の強度の抑圧状態に追い込まれると考えられるのである。もちろん男と彼は内山老人のような精神病患者ではなく、通常の社会生活を営む人間たちであり、そのような人間同士の関係においても仮象が出現する事態が描かれることで、こちら側とあちら側の連続性が示され、高度経済成長期の社会における希薄化した人間関係の暗部が剔抉されることになる。

また「仮象」においては、仮象と評されたチンドン屋が、次には仲間との間で人間としての表情を生き生きと取り戻している姿が描かれていたことにも注意する必要がある。彼がそこから見出しているのは、仮象の問題であると同時に、仮象であるために「禁じられたりしぼられたり抑圧されていたもの」を産出するシステムの問題でもある。彼が、仮象としてのあちら側から人間としてのこちら側へ戻ったチンドン屋の姿を目の当たりにして「あるショック」を覚えていたのは、一人の人間の中であちら側とこちら側が連続している状態がそこに見出されたからに他ならない。

このように「仮象」には、日常の社会生活を対象にしてその日常性に潜む人間の「為体の知れないもの」を析出する視線が装置されているといえるのだが、「幻化」(新潮)一九六五年六月(八月)ではこのような視線が具体的な病態に即して主題的に表現されることになる。その中心となるのが、「幻化」の主人公であり、精神科の患者である五郎である。「幻化」の冒頭は、五郎が飛行機から眺めた「灰白色の雲海」の風景から始まる。次に五郎の視点が右のエンジンに転じた時、読者は五郎の世界像に同一化させられていくのである。

五郎は視線を右のエンジンに移した。
まだ這っているな

と思う。

それが這っているのを見つけたのは、大分空港を發つて、やがてであつた。豆粒のような楕円形のものが、エンジンから翼の方に、すこしずつ動いていた。眺めているとパツと見えなくなり、またすこし離れたところと同じ形のものがあらわれ、じりじりと動き出す。さっきのと同じ虫(き)なのか、別のものなのか、よく判らない。幻覚なのかも知れないという懸念もあつた。

病院に入る前、五郎にはしばしばその経験があつた、白い壁に蟻が這っている。どう見直しても蟻が這っている。近づいて指で押さえようとすると、何もさわらない。(同行者)

読者が同一化させられたのは、幻覚を見るような患者の視線と、そこを中心紡ぎだされる不安定な精神状態として象られた言説空間なのである。このあと、後に丹尾と名乗る乗客との会話を通して、五郎は自分が見ていたものが虫や幻覚などではなく、飛行機のエンジンから漏れた油であることを知らされる。そして読者も、一連の会話を通じて五郎が抱える問題に直面させられる。すなわち飛行機のエンジン部に生じている異常が、五郎にはそれとして理解されない事態を通じて、脳神経系が客觀的事象を事象そのものとして認知できなくなったとき、世界像がどの変容するかという問題に直面させられるのである。

この五郎は、**白い花**の章でも風呂の中で幻聴を聞く。

誰かが耳のすぐ近くでささやいた。

恥知らず!

五郎は周囲を見廻した。誰もいない。壁だけだ。壁が口をきくわけがない。

また幻聴が出て来たな

と思う。聞き慣れた声だが、誰のでもない。抑揚も感情もない声である。

抑揚も感情もない声」が五郎の日常の中に突如出現した幻聴であるにもかかわらず、五郎はそれを「また幻聴が出て来たな」として、日常性を遮断するものとしては意識していない。しかし五郎は、幻聴を幻聴として認識はできるが、幻聴が出現する意味では正常(健康)ではなく、異常に近接している状態にある。正常と異常は、紙二重の差に過ぎないだろう。しかしその差を乗り越える時、性格や感情ががらりと変わってしまう。おれにとって、それがこわかつたのではないのか、**白い花**と語るように、五郎は自分を「紙二重」で「異常」に隣接するものとして自覚しているのであり、この「異常」に対する恐怖が五郎自身のアイデンティティを脅かし緊張を強いるものとなっている。このような微妙で不安定な精神状態にある五郎に幻覚・幻聴が発症することで、五郎の精神状態の不安定さが強調されると同時に、五郎を中心に構成される「幻化」の世界も、不安定な世界として印象づけられていくことになる。事実「幻化」は、このような幻覚と幻聴ばかりか、眩暈の中でみた悪夢や鬱状態での死への誘惑(砂浜)のエピソードなどが挿入されることで、現在の五郎の世界像を不安定な世界として構成しているのである(注12)。その現在には、二十年前の福の死の記憶や精神状態の不安定な入院時の記憶、入院生活の記憶などのエピソード群が積み重なり、そこへ交通事故で妻子を喪った丹尾や離婚した女などの、これまた鬱状態を示す他者たちとの交流のエピソードが刻み込まれることで、いよいよその世界像は不安定な世界としての輪郭を強固かつ鮮明にしていく。

五郎の幻覚・幻聴・鬱状態を核に様々なエピソード群によって不安定な世界像が構築される「幻化」の構成は述べてきたとおりだが、その世界像から析出されるフラジリティは登場する他の人間たちが抱え込んでいる生のフラジリティを、五郎が認知することも可能にしている。したがって読者は、五郎ばかりではない、丹尾や離婚した女たちが抱え込む心の鬱屈や

荒廃を直接的に理解することができるのである。かつて詩篇「死床」で死に近接した結核患者の表象を用いて生の輪郭を顕在化しようとしたことと同様に、ここでは精神科の患者の視点によって、人間が様々な社会生活によって損なわれ抑圧を刻みつけられた結果としての心の変質が、苦悩の言説として析出される。そしてそれらを、一九六〇年代当時のように精神医学的な言説によって病的なものとして解釈し、社会の外部に排除していくのではなく、人間同士の共感を介在させた支えあいの中に位置づけるべきものとして、最後の「火」の章のエピソードは登場する。

自殺願望を表わした丹尾と、彼が阿蘇の火口へ飛び込むかどうか賭けをした五郎は、丹尾を見ているのか、自分を見ているのか、自分でも判らないような状態になって、五郎は胸の中で叫んでいる。／　　「ひっかり歩け。元氣出して歩け！」とよびかける。この最後の五郎の声は、五郎本人だけでなく、丹尾のように生きることへの氣力を喪失した者達への激励として強いメッセージ性を帯びて響き渡っている。読者は、五郎の視線を介在させることで、人間が社会生活を営む上で抱え込まざるを得ない生のフラジリティのために、病み疲弊し右往左往しながらそれでもなお生きようとする意志を持ち続ける姿に共感を覚える。このように病というフラジリティを刻んだ者の視点に拠ることで、生きることの苦痛・恐怖・悲哀と生き続けることへの意志を表出したことが、自身鬱病に苦しんだ経験を持つ梅崎が「幻化」で成し遂げた一つの達成といえるだろう。

四

見てきたように一九五〇年頃から六〇年代において、梅崎が自身の鬱病を含めて様々な作品・エッセイに鬱病や精神病とその患者の姿を表現してきたことには、患者についての単なる啓蒙という以上に、社会と、社会の外部に配置される精神病とその患者との間の連続性を指摘し、健康と病の区分を設定する精神医学的言説を相対化しながら、外部化した視点から人間とその生のフラジリティを捉えなおすという意味が見出された。

しかしその一方で、因日¹³の「私」が精神病院を訪問した時に、患者の態度を「無関心」であると表現していたことについては看過できない問題がある。精神科医の石川信義は、一九六三年に精神科医になって初めて着任した精神病院の思い出を以下のように述べている。

そこでは、患者たちは完全に無視されていた。彼らは打ち棄てられ、打ち棄てられたままに「倉庫」に格納され。彼らの人生の時間だけが、ただ徒らに空費されていた。

“人間倉庫”と呼ぶにふさわしい建物そのままに、彼らは人でなく“物”として扱われていた。“物”としての存在しか認められないから、彼らのほうもやむなく“物”となった。

中略 私と彼らを隔てる「膜」が、彼らが物となった証拠であった。彼らは膜を作って、繭のなかに自分の人間性を押しこめ、外界との交わりを拒絶してしまっただけだ。

彼らをして“物”と化せしめたもの、それが、ここ、精神病棟であることはもう明らかだった^{注13}。

ここで石川が「膜」と表現しているものこそ、因日¹³で描かれていた患者たちがみせる「無関心」に他ならない。梅崎が、「無関心」を精神病患者の病態と捉えていたのに対して、石川の証言はそれこそが精神病院によって患者に加えられた虐待の結果であることを明らかにしている。梅崎の創作上の関心が精神病患者そのものになかったことが、精神病院の深刻な実態を捉え得なかった限界を生み、発表された諸作品における精神病患者の表象にも問題を残すことになっていたのである。もちろんこの点をもつて、梅崎文学の全体を否定し去ることなどはできないのだが、少なくとも梅崎文学に認められるこの精神病患者の言語表象の問題は、梅崎個人を含めた当時の社会の精神病に対する認識レベルを参照しながら、検討すべき次の課題として我々の前に提出されている。

注

- 1 梅崎春生「気質季報」第一〇号、一九七六年三月。
- 2 付記「梅崎春生全集」第七卷、一九八五年四月二〇日、沖積舎、四一二頁。
- 3 憂鬱な青春「群像」一九五九年三月、のち 梅崎春生全集』第七卷、一九八五年四月二〇日、沖積舎、六四頁。
- 4 学生時代の梅崎春生「梅崎春生全集」別巻、一九八八年一月一〇日、沖積舎、二七九頁。
- 5 母友梅崎春生「梅崎春生全集」別巻、一九八八年一月一〇日、沖積舎、二八二頁。
- 6 注3に同じ、六六頁
- 7 私は身近に何人もノイローゼの患者を知っているし、私自身青年時代にその状態になったことがある。青年の時は被害妄想を伴って、下宿に住んでいたが、壁の向うや廊下で私の悪口を言うのが聞こえる。何でおれの悪口を言うのかと女中を難詰したり、揚句の果て下宿の婆さんを椅子で殴って、留置場に一週間入れられたことすらある。私のノイローゼ闘病記「梅崎春生全集」第七卷、一九八五年四月二〇日、沖積舎、二四三頁」と述べている。
- 8 二重の曲り角で「新潮」一九五九年六月、のち 梅崎春生全集』第七卷、一九八五年四月二〇日、沖積舎、一四〇頁。
- 9 神経衰弱』盛衰史」エリイカ」第三六卷第五号、二〇〇四年五月。
- 10 鈴木國文「憂うつはもう機能しないのか」エリイカ」第三六卷第五号、二〇〇四年五月。
- 11 鷺田清「顔の現象学」一九九八年一月二〇日、講談社学術文庫、二二一、二二三頁。
- 12 土井寛之にも、幻化」の中には、以上に述べたような違和感、不透明、空白、錯覚といったようなものが数多く挿入されているが、それと並行して特に「幻化」では、不思議な幻覚が表現されて、梅

- 崎春生の病跡とその文学 中」福岡大学人文論叢」第二五卷第二号、一九八三年九月、いるという、表現法に注目した指摘がある。
- 13 忪病める人たち』一九九〇年五月、岩波新書、一七、一八頁。

付記

梅崎春生の作品本文の引用は、沖積舎版「梅崎春生全集」に拠った。なお、引用した本文中に精神分裂病という病名があるが、現在は「統合失調症」に変更されている。当時の社会状況を考慮して、差別的意図に基づく表現ではないと判断して引用している事をお断りしておく。